

西田谷洋編『あまんきみこの童話を読むⅡ』

—ファンタジーの可能性—

團 野 光 晴

戦後日本を代表する作家・大江健三郎がこういうことを言っている。難しい問題に突き当たった時、数式を解く具合に一旦それを括弧で括って、「ある時間、待ってみる力」を発揮することが、子供には必要だ。そのうち、括弧のなかの問題が、自然に解けてしまう場合もある。そして「ある時間」たつて、括弧をとりてみても、まだ問題がそのままであれば、今度こそ正面からそれに立ち向かって行かねばならない。しかし子供は、なんとかしのいだ「ある時間」のあいだに、自分が成長し、遅しくなっていることに気がつくはずだ（ある時間、待ってみてください）、「『自分の木』の下で」朝日新聞社、二〇〇一年所収）。これはそのまま、優れたファンタジー論にもなっているだろう。困難を一旦括弧で括りだして子供を守り、育て、やがて自分で困難を解決できる大人にするアジールとしてファンタジーを捉えるなら、それは軽視できない。それは、保育園や学校のような母性を含み持つものとして、現実社会において重要な意味を持つ。そして、大人も子供にならざるを得ないよう

な困難に充ち満ちている昨今、ファンタジーが万人にとって切実に必要とされていることは、現代文化の状況を見ても明らかだ。例えば、日韓関係がかつてない厳しさにある中、「君の名は。」が韓国でも大ブームになったと聞くが、大変意義深いことなのである。ただし、括弧はいつか外されなければならない。一旦括弧で括って外に出した問題は、やがては解かれねばならず、それから目を背けてファンタジーの中に閉じこもってばかりいれば、将来に大きな禍根を残すことになる。その意味で、ファンタジーの内部は、外部に通じるものでなければならぬのだ。このような両義性を持つファンタジーの作り手として現代を代表するあまんきみこの作家性・時代性の由来の一端は、旧満州で生まれ育った幼少期にあると言える。特に「少女時代を満州で過ごして」（野上暁編『わたしが子どものころ戦争があった』理論社、二〇一五年所収）で言及のある、敗戦から引き揚げまでの一年四ヶ月余りを過ごした大連での経験が、あまん童話の重要な原点の一つであろう。敗戦直後の混乱を経て再開された

女学校での「百八十度の転回」教育に耐えかね図書室に籠もる一方、「五族協和」「王道楽土」の欺瞞が露呈した後でのロシア人や中国人との不思議に明る共生を経験した、戦前とも戦後ともつかぬ奇妙なモラトリアム空間としての大連。それを、楽園の背徳性^①として普遍化し自身の創作原理とした痕跡は、あまん童話の至る所に指摘できる。そしてこの「大連」は、日本人引き揚げとともにそのまま「本土」にスライドし、平和と繁栄を享受しながら歴史を清算しきれない戦後日本として復興したのであって、満州（及び大連）を失った痛みからの回復に潜む罪の感覚を保持し続けるあまんが創作する童話は、優れて時代の表現でもある。それは、戦後文学の一ジャンルとして朴裕河氏が提唱する「引揚げ文学」（「引揚げ文学論序説」人文書院、二〇一六年）と捉えることも出来よう。こう考えてくれば、戦後七十年以上を経て国際協調路線が危機に瀕している今日、あまん童話を論ずることは、国語教育研究・文学研究から出発して、ファンタジーとしての平和国家たる戦後日本の原罪を見極めつつ、同時にその可能性を追求する地点まで射程に収めねばなるまい。そしてその可能性は、ファンタジーの外側から銃や軋弾で強引に括弧をぶち破ろうとするのではなく、ファンタジーの内側から外側との積極的対話が試みられる過程で、括弧が自ずと外れるようになることに存しよう。括弧が何重にも嚴重になされ問題が先送りされる傾向にある今日、そのアクチュアリティをますます高めるクール・ジャパンの元祖Ⅱあ

まんファンタジーの両義性と可能性を、どこまで追求できるか。あまん童話論の成否は、そこにかかっている。

この観点から、西田谷洋編『あまんきみこの童話を読むⅡ』を見ていこう。本書は西田谷氏が執筆した「はじめに」一本及び一作品ごとのあまん童話論七本と、大学で西田谷氏の講義を受講した六名によるやはり一作品ごとのあまん童話論六本の、計十四本の論文からなる。前著『あまんきみこの童話を読む』（一粒書房、二〇一四年）の続編と目され、西田谷氏の授業を契機とした共同研究の成果報告と言える。前著序文で西田谷氏が「不可視を可視化する」という形で指摘したあまんファンタジーの両義性を、批評理論も参照しながら一作品ごとに語りの構造に着目して分析、その可能性を評価するというスタイルは、前著に引き続き一貫している。そのスタイルが各論ごとに、文体のレベルにまで律儀に踏襲される様は、親鳥の後をヒナたちが一列になつてよちよちついていくアイガモの親子といった風情も感じられてほほえましい。そこには、明確な目的と方法意識の下、学生に着実に実力を身につけさせ、それを目に見える形で成果としてまとめ上げる、西田谷氏の教育者としての確かな力量が感じられるのでもある。その意味で本書は、ルーブリック評価にも対応した授業エビデンスとしての性格も持つものであろう。それは単に形式が整っているということにとどまらない。受講生諸君が、西田谷氏の指導を受けながら持論を一般の批評に耐えうる水準にまで鍛え上げ、広く流通し読み継がれる

活字冊子として結晶できたことに、大いなる手応えと喜びを感じ、自分の成長を実感できたに違いないことを、本書は確実に伝えてくるのである。アクティブ・ラーニングの必要が叫ばれる中、これからの教育のあり方のモデルを明確に示したものである、本書が教育界全般に寄与するところは大きい。

そのような本書の性格上、文学研究としては敢えてストイックに、親鳥がヒナに餌を噛み碎いて与えるような、嘴の黄色い水準にとどめたということもあるのだろう。各論ともテキスト分析の水準は確かだが、これを本格的なあまみ童話論に仕上げて行くには、やはり作家論や文学史・文化史的な観点に根ざした論者独自の問題意識を、説得力ある形で導入していくことが必要と思われる。「はじめに」に続いて巻頭を飾る西田谷氏「わたしのかさはそらのいろ」も、青い傘がそのまま青空になる「比喩の現勢化」が生感覚を取り戻すこの作品の異化効果についての指摘は的確で鋭いが、前著で論考された「うさが空をなめました」との関連を考えれば、青空が自由の、ハンカチや傘といった布製品が母性の隠喩であり、男女雇用機会均等法成立から十年経たない段階で女性就業率のM字曲線（新卒で就職後、結婚・出産を契機に一旦退職し、子育てが一段落してから再就職する女性のライフ・サイクルを示す）が未だ問題視されていた頃発表された「うさが」が、かわい子ウサギたちと出遭うファンタジーを経て女性が自らの自由を子供に母性として捧げることを受忍するまでを描いたのに対し、均等法成立から

二十年以上を経た段階で発表された「わたしの」が、全ての子供たち（及びそれに準ずる動物たち）を包み込む青い傘がそのまま青空になるというファンタジーを通じて母性の社会的共有による女性の自由獲得のイメージを描き出し、「保育園落ちた、日本死ね」という文言の出現を予言した格好になっていることが、見えて来るのではないか。そこから、作品の異化効果の由来や、両作品間における文化・社会状況の変遷などを視野に入れつつ、「非現実な幻想」でありながら「社会との交感でもありうる」（「北風をみた子」）「支配的な文化を強化しつつ、そのいっぽうでそれを疑問に付すという、ふたつのことを同時に行っている」（「いつかい話、いつかいだけ」）と西田谷氏が評するファンタジーの立場から社会に揺さぶりをかけ、例えば子供の立場からの正当な要求に基づく母性の社会的共有などの、新たなビジョンを導出する異化効果も可能になろう。

ただ、西田谷氏の各論は、テキスト分析の段階にとどまっても、個々の作品におけるファンタジーの両義性のあり方をおおむね正確に見極めている。「きりの中のぶらんこ」「さよならのうた」「ふしぎな森」「かくれんぼ」を論じた氏の各論は、人を一旦優しく受け入れながら、次第に建設的な自省に誘い外部に送り出して自立させるファンタジーの両義性のうち、主に後者の要素について作品ごとに分析したものと見える。それはファンタジーの豊かな可能性を感じさせ、西田谷氏の見識と力量を感じさせる。しかし、分析結果の評価については、分析理

論以外の要因からも、その妥当性を客観的に示して欲しいと感じられることが、ないではない。例えば「さよならのうた」についての論考では、ファンタジー空間で出遭った男の子ともう少し遊ばずに別れてきたことの罪悪感を祖父の死と重ねて隠蔽し、祖父を悼む自分を正当化する主人公の少年の欺瞞が、語りによって暴露されるとの指摘があるが、この作品はファンタジーに助けられて人の死という重い現実を受け入れる力を得た少年の成長を感動的に描いたものと見るのが自然であろうし、ファンタジーの力に対する作者あまんの信頼を示す秀作と言ってよい。それに異を唱える問題設定は興味深いが、その必然性については説得力ある議論が欲しいわけで、その際には広く作家の問題や政治・社会・文化状況からの視点の導入が必要と思われるのだ。

同様のことは他の論者にも言える。高木佐和子氏「「海うさぎのきた日」」では、ファンタジーの両義性を敷衍する形で、アニメズムによって異世界へと接続する力と、理性によって世界を区切り秩序立てる力を併せ持つ言葉の両義性、という秀逸な指摘がなされ、ファンタジーがこの言葉の両義的な力に由来することが確認されて、人を育てる言葉の力ということに改めて気づかされる。ただ最後のところで人間と動物の権力関係という議論が展開し、主人公の少女の消極性に「動物たちとの共存の問題に積極的に取り組もうとしない人間たちの姿」を重ねて結論とするのにはやや飛躍があるように感じられ、そのよう

に議論を展開する必然性について丁寧な説明が欲しくなる。むしろ、主人公の少女の、「姉」としての自意識と、ファンタジーとの関係について、突っ込んだ議論が開きたいと思った。この人間と動物の権力関係という問題設定に基づくテキスト評価は黄亜蘭氏「野のピアノ 野ねずみ保育園」にも見られ、人間とネズミの境界が曖昧にされることや、ネズミが人間を利用するという権力関係の揺らぎが指摘されるが、これも尤もながらそのように評することの意義が明確にされるべきであろう。この作品は自由人的な独身男性が、予定されていた姉の不在に際して幼い甥姪の母親代わりを務めるべく、あらかじめネズミからの小包という小道具までこしらえる凝った演出を伴ってファンタジーを語り、それを子供たちと一緒に楽しむお茶目なおじさんぶりを発揮するところが魅力で、ファンタジーがファンタジーであることをあらかじめ読者に示しているメタ・ファンタジーとしての要素が、本作品の問題点となるところだ。この点、高松直子氏「ひゃっぴきめ」においては、作品の主題に沿う形で人間と動物の境界と権力関係を問う評価基準が適切に用いられ、デリダの主権論も参照しつつ「愚かさは獣ではなく人間に固有のものであり、主権者こそが愚かであることを示している」という鋭い指摘を含んだ結論が、無理なく導かれている。対象によってどのように問題を設定し、どのような分析理論を採用するかを見極めることが、論者の腕の見せ所であろう。それに関連して言えば、山田斗志希氏「カーテン売りがやつ

てきた」は、「幸福」は精神に作用する毒であり、外界への注意を奪つてしまふ」と指摘して、本作品を「幸福」が大勢に流されること、注意・批判意識を持たないことが破滅へと至るといふイデオロギー批判の物語」とするが、子供を守り育てつつ送り出さねばならないファンタジーの両義性への認識を適切に踏まえつつ、出口のない似而非ファンタジーへの警鐘という本作の本質を浮き彫りにした点は、高く評価できる。ただし、ファンタジーの両義性という見方をやや勇み足的に敷衍しすぎる形で、語りの分析から本作を「ホラー」として、「社会批判」としても娯楽としても両用に享受することが出来るのである」としてしまふのは、いかがなものか。ファンタジーの両義性を、その内部と外部との連続性として捉えるのではなく、このように内部と外部との分断として捉えてしまふのは、ファンタジーを専ら単なる娯楽と見て高を括ることで、却つてカーテン売りの餌食になつてしまふことに繋がらないか。「ネタ化」や「パカッター」などの現代の文化現象とそれにとりまかれる自己を省みつつ、性急なファンタジー批判が似而非ファンタジーに陥る危険を伴うことを自覚し、功罪併せ持つファンタジーに真剣に向き合うことが、適切な問題設定と批評理論の採用に際して重要であらう。

そのことは東海義仁氏「『天の町やなぎ通り』」についても言える。東海氏は本作品を、「局長がとにかく自身のことを考え、自身が自己満足する物語である」と断罪する。ファンタジーの

外部から括弧を外すファンタジー批判である。人がいづれそこへと出ていかなければならないファンタジー外部からの声としてこれは全く正論であり、ファンタジーに閉じこもり続けようとする欺瞞や出口のない似而非ファンタジーを撃つ上で有効でもある。ただ、これではファンタジーの意味が全く素通りされてしまふことにならないか。「天の町」といふファンタジーは、母を思う子の心と、その子を思いやる父の心、その父をまた思いやる子の心に、それら父子の心を思いやる局長の心が重なる所に成立する。その三者の心が抱く思いが自己満足に過ぎず、ここにあるのが同床異夢というべき事態であるとして、そのことを理知的に冷徹に解剖する芥川龍之介「枯野抄」のようなやり方もあるのだが、少なくとも局長の自己満足の産物としての「天の町」のイメージが、妻に先立たれ幼い子供と二人これから生きていかなねばならなくなつた若い父親の心を慰め励ますであらうくらい美しく描かれていることは否めまい。それでも少年の手紙を「天の町」にある少年の母の家に届けた帰途において局長の自転車のきしりが止まないのは、そもそもが少年の父親の嘘から始まり、現実死んだ母の存在を決定的に疎外する「天の町」のいかかわしさを告知するサインなのであつて、そこに、救済されることに潜む罪という、子供向けとばかりは言えないこの童話の苦い認識がある。「自己満足」といふ批判は、その見極めを踏まえることで、内在批評として本当の説得力を発揮しよう。そしてここで、「満州」は、日本の傀儡の国でし

た。(中略) 知らなかった、見なかった、聞かなかった、子どもだったは免罪にはならないでしょう。むしろ、より罪深い場合さえあると思います」(前掲「少女時代を満州で過ごして」という作者の言葉を想起するならば、この「天の町」が、愛しくも失われ、しかも罪悪感とともに一生つきまとう「大連」と重なってくることは明らかだ。それは、作者の実存としての「大連(及び「満州」)」を具体的に証明している。

その意味で、孫媛媛氏「くもんこの話」が、少女時代の曾祖母とくもんこの交流のあり方、及び中国文化を視野に入れたくもんこの白のイメージの分析から、旧満州で日陰に追いやられていた中国人民の姿をくもんこに見て作者の罪悪感の所在を指摘し、ラストでくもんこが再来した際に曾祖母との関係が「主人と使用人のような関係から対等な友達の関係へ変化した」ことを発表当時の日中国交正常化と関連づけながら、本作を「中日の友好、平和への喜びと赦しへの祈りを表現した」「『罪悪感』と新たな希望を描いた物語」と評したことは、極めて妥当である。的確なテキスト分析と作家論的・状況論的視点がうまく噛み合って生産的な成果を生んでおり、短いながらも本格的論文としての手応えを感じた。当時の周恩来首相が提唱した「小異を残して大同につく」という、様々なことを括弧に括った寛大なファンタジーに助けられて日中国交正常化は成ったわけだが、日本の側としてはこれに甘えることなく、自ら種々の困難に誠実に向き合い少しずつ括弧を外し、真の和解に向けて努力

を続けるべきなのだ。それが、あまん童話の指し示す方向性であることを、孫論文は示唆している。ファンタジーの可能性がいかなるものなのかについての積極的な提案が、ここにある。とまれ本書が、ファンタジー空間としての西田谷教室の豊かな可能性を示すものであることは間違いない。ここから将来、どのような鴻鵠が羽ばたくのか、楽しみである。

(二〇一七年一月二七日 一粒書房 七七頁 非売品)
(だんの・みつはる 石川工業高等学校教授)